

## 地域の力を引き出す 「中尾歌舞伎」



＝農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一＝

数年前にフェイスブックを始めたが、その“友だち”から長野県伊那市の長谷中尾地区で行われる「中尾歌舞伎 春季定期公演」のお誘いを頂いた。そもそも家内が同市高遠町の出身で、合唱やピアノをやっている家内の弟夫婦と音楽つながりのMさんと“友だち”になったものだ。

長谷中尾は伊那市の中心部から東に車で30分ほど、南アルプスの麓に位置する。三峰川と黒川川が合流する所にある小高い丘に集落があり、30世帯ほどが残る。1960年代に水力発電所が建設され、ここからの分水によって畑地から水田に開田した際には縄文時代の土器片が出てきたというから、歴史の古い土地であることは間違いない。

農村歌舞伎といえば、長野県では大鹿歌舞伎がよく知られるが、その大鹿村は長谷中尾から40～50キロほど南にある。大鹿歌舞伎の歴史は「300余年」とされるが、中尾歌舞伎は「江戸時代の1767（明和4）年ごろ、この地に旅芸人が来て、上中尾の山の神様を祭ってある神社の前宮で演じたのが始まり」と伝えられており、おおむね同じ頃に始まったとされている。祭りと歌舞伎が一体化して「この地に芸能として芽生え、定着し、受け継がれるようになった」という。

それが太平洋戦争の勃発によって“消滅”したものの、約40年を経過した1986年に「地域の若者たちがお年寄りの指導を受けて復活上演し、今年で38年目」となる。ご多分に漏れず、ここでも都市への人口流出により過疎化が進行する中、「今こそ先人の残した芸能文化を復活させ、生き生きとした地域をつくろう」ということになり、若者を中心に「中尾歌舞伎保存会」を立ち上げた。96年には伝統文化保存伝承施設として「中尾座」が設けられ、ここを活動拠点にして定期公演が行われるようになった。

今年の春季定期公演はゴールデンウィークの前半、4月29日の「昭和の日」に行われた。会場の中尾座には花道が設けられ、2階席もあって、200人弱を収容することができるが、チケットは早々になくなり、長谷にある別の二つの施設のテレビ画面で見られるようにしたい。

この日の演目は「奥州安達原三段目 袖萩祭文の段」。複雑な筋書きなので、紹介は割愛させていただくが、これが素人による歌舞伎かと驚くほどの好演・熱演で、洗練されてもいて、たつぷりと2時間ほど堪能した。それぞれにひいきの役者が登場すると「〇〇屋！」の掛け声が飛び交い、見せ場ではたくさんのおひねりが舞台に



終演し、出演者が勢ぞろいしてのあいさつ。舞台にはたくさんのおひねりが。

投げ込まれた。まさに舞台と客席が一体となって、涙あり、盛り上がりありと、歌舞伎の世界にすっかり魅了されてしまった。

舞台には13人の役者が登場したが、うち数人は初舞台とのことで、新陳代謝が進みつつある。主役の一人を務めたMさんも初舞台で、東京から移住。役者の他にも三味線、鳴り物、照明、着付け、化粧と、多くの人たちの共同で舞台は成り立つ。駐車場案内も東京の大学生たちが分担。伝統文化・芸能が持つ、人を呼ぶ力の大きさを実感させられる良い連休の一日となった。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫に入り、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、2013年11月より現職。

〔主な著書〕

「生産消費者が農をひらく」「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上、創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など